

『菅家後集』所載「哭奥州藤使君」の構成論考

一

『菅家後集』所載の「486 哭奥州藤使君 九月二十二日、四十韻」は五言八十句古詩のスタイルで、「敘意一百韻」に次ぐ長編 作品である。題注にもあるように、道真五十七歳の時、太宰府左遷の当該年の秋、九月二十二日に詠まれたとある。その内容は、人の呪詛を受けて亡くなったと伝え聞く旧友の陸奥守藤原滋(しげ)実(ごね)の死を京都からの家族の手紙とそれを太宰の謫居に届けに来た使者より知り、その死を悼み、さらに今の我が身を鑑み、ともにこの世の非情を嘆く心情が、鬼気迫る筆致で貫かれている。太宰府での道真の心情の変遷を知るうえで注視すべき作品である。この詩については、既に注釈書(注一)を公にした。又、その作品内容より窺えることを「総括」の形で、前稿(注二)で提起してみた。しかしながら紙頁の制限があり、その中で十分意を尽くすことが出来なかった恨みがあり、今稿は、再度、全文を取り挙げ、構成論に視点を置き、更に考察を深めることが大きな意図である。

具体的には、前稿(注二)で提起したことを踏まえて、改めてここに整理し考察を深めることにある。

それは本詩の第七十九句・八十句にある「拙詞四百言／以代使君誄(拙詞四百言／以て使君の誄に代へん)」の句内容の意味するもの、とりわけ「誄」の使い方に注視する必要がある点。そしてここから本詩の構成の仕方の糸口が見える点の二点である。